

本論文は、アメリカの高等教育機関における地域参加型学習に従事する専門家の職務内容調査を通し、職員や教員との違い、同専門家による教育参画（学生指導）の意義を明らかにすることを目的としたものであり、次の7章で構成されている。

序章：研究の背景と目的

第1章：地域参加型学習とそれに従事する専門家

第2章：サービス・ラーニング（SL）の理論とその教育効果

第3章：第一調査：実際の教育現場でのSLコーディネーターの職務内容

第4章：第二調査：アメリカのSLコーディネーターへのアンケート調査

終章：本研究の成果と今後の課題

補論：SLコーディネーターによる教科開発

本論文では、アメリカで先進的に取り組まれている地域参加型学習（Community Engaged Learning）の中心的な教育活動であるサービス・ラーニング（SL）と、SL科目やプログラムを運営する専門家のSLコーディネーター（以降コーディネーター）に焦点が当てられており、その専門家の職務実態が詳細に論述されている。先行研究では、コーディネーターの役割・業務が、事務的な後方支援から、SLの教育効果検証や授業補助など、教育への参画へと広がっていることが整理されている。一方で、その教育参画の実態は、文献ではその名目上の役割に留まっており、その具体的実態についての研究は極めて少ないため、本研究ではその点に着目している。

調査を進めるにあたり、著者は「第一調査（予備調査）」をもとにアメリカの大学でSLに従事するコーディネーターにインタビュー調査を実施し、質的分析を通して教育参画の具体的実態や、その専門性を明らかにしている。また、この調査を通して明らかになった残余部分調査を「第二調査」と位置づけ、教員とコーディネーターの違い、コーディネーターによる教育参画の有無が職務に対する態度にいかなる影響を及ぼすかといった点を調査している。特に「第二調査」では、アメリカの大学でSLに従事するコーディネーターに対してアンケート調査を実施し、質的・量的に分析し、教員とコーディネーターの違い、コーディネーターによる教育参画の有意性を明らかにしている。

本研究は、コーディネーターによる具体的教育活動を明らかにし、コーディネーターによる教育参画の意義を見出している点、将来的に日本のSL及びコーディネーターの発展に寄与しうる点に大きな意義がある。また、研究の意義だけでなく、アメリカの大学へのインタビュー交渉・調整、直接現地に赴きコーディネーターからインタビュー・データを得ている点、30以上のアメリカの大学からアンケート調査データを入手している点など、国際的に研究を展開したスケールの大きさが賞賛に値する。本論内でも述べられている通り、今後追究していくべき残余課題はあるものの、コーディネーターによる「大学の教科開発」という観点は新奇性があり、今後の国内SL研究に示唆を与えるものだと言える。

よって、本教科開発学専攻の学位論文として認める。

(課程博士・様式11)

最終試験の結果の要旨及び審査委員 報告書

学籍番号		氏名	馬場 洸志
論文題目	アメリカの高等教育機関における Community Engagement Professionalに関する研究 ～サービス・ラーニングコーディネーターに焦点をあてて～		
論文審査結果	合		
最終試験結果	合		
最終試験 審査委員	審査委員長 委員 委員 委員 委員 委員	野平 慎二 村山 功 中野 真志 石川 恭 倉本 忠男	

(最終試験の結果の要旨、1,000字程度)

別添参照

審査委員長

野平 慎二



最終試験は、30分の研究内容の発表と、60分の質疑応答によって行われた。研究内容の発表では、研究目的とその背景、先行研究の総括、リサーチ・クエスチョン (RQ) の検証についてのプレゼンテーションが行われた。内容は以下のとおりである。

本研究の目的は「アメリカの高等教育機関における地域参加型学習に従事する専門家の職務内容調査を通し、職員や教員との違い、同専門家による教育参画 (学生指導) の意義を明らかにすること」であり、その研究に至った背景が、先行研究の内容をもとに説明された。その後、本研究の調査がどのような流れで進められたのか、いかにして RQ を導き出していったのかが説明された。

RQ①「事務的業務ではなく、教育的側面において、実際の教育現場で SL コーディネーターにどのような職務が求められているのか？」は第一調査に位置付けられており、アメリカの高等教育機関向け求人サイトを用いて、予備調査に当たるコーディネーターの職務記述分析が行われた。その結果として、コーディネーターに最も求められている職務は学生のリフレクションの支援、事前学習の運営であることが明らかとなった。この予備調査結果をもとに、アメリカの大学で SL に従事するコーディネーター 8 名にインタビュー調査が実施され、質的に分析された。その結果の残余部分を第二調査と位置づけ、RQ②「教育参画における教員と SL コーディネーターの違いは何か」と RQ③「コーディネーターによる教育参画の有無は、コーディネーターの職務に対する態度や考えにどのような影響を及ぼすか」の調査が進められた。RQ②・③の調査では、アメリカの大学で SL に従事するコーディネーターに対してアンケート調査を実施し、30以上の大学に渡る64名の有効回答が質的・量的に分析された。結論として、教員とコーディネーターの違いは「対応範囲」、「地域との連携」、「地域の課題解決」、「SL に特化した指導」、「存在」の項目で違いが顕著となり、コーディネーターが教育参画することで、「コーディネーターの地域社会への関りに対する態度」と「自身の専門的職能開発」という側面において有意な影響を及ぼすことが明らかとなった。

質疑応答では、教員と SL コーディネーターの役割分担と連携のあり方、コーディネーターの専門性の担保に係る認定制度や学会の現状と課題、経営学ならびに教育学それぞれの視点からみたコーディネーターの位置づけ、本研究での分析結果を踏まえた日本におけるコーディネーターの今後の展望などについての質問が出され、いずれの質問に対しても的確に回答がなされ、自身の研究に対して深く理解していると評価できた。以上の点と、別紙の「審査概評」で述べたことも合わせ、最終試験の結果は「合」と判断した。

審査委員長

野平 慎二

